

近世ロンドンの居酒屋に関する研究（続）

佐藤 清隆

A study of drinking establishments in early modern London

Kiyotaka SATO

1997～8年度の《重点個人研究》の研究課題、「近世ロンドンの居酒屋に関する研究」では、当時ロンドンで未曾有の増大を示し、下層の人びととの結びつきが強かったエールハウスという名の居酒屋に対する政策の変化を、13世紀後半以降のエール統制からエールハウス統制への変化の流れのなかに位置づけ、検討を試みた。今回は、エールハウスに比べると件数が少ないが、地方都市に比べるとはるかに多く、ロンドンではエールハウスと並んで、非常に重要な居酒屋であったタヴァーン〔葡萄酒販売を中心とするかなり特別な居酒屋〕とそれに対する政策について検討を進めている。

中流階級との結びつきが強いと言われるタヴァーンは、1633年の調査ではシティとリパティだけで211軒もあり、当時の文学作品にもよく登場するが、その世界や政策に関する本格的な研究はほとんどおこなわれていない。私は、これまでのところ、ロンドンのタヴァーン政策を中心に、主に市参事会議事録や市議会議事録を史料として用い検討を続けている。その政策の内容は、①1553年の「営業許可制」と関わる規制、②建物・場所の適否に関する規制、③指定日時の規制（安息日・日曜日）、④肉食禁制（禁止日の肉の調理に関するタヴァーンの調査）、⑤その他の規制（娯楽・営業時間・看板など）のほぼ5点にまとめられる。とくに、②の政策の展開が1590年代から1640年代にかけて顕著であり、そうした政策には市参事会・委員会・葡萄酒商人組合の幹事が絡んでいる。今後、こうした政策の背景やエールハウス政策との異同等について明らかにしていきたい。

なお、タヴァーンで販売される葡萄酒はほとんどが輸入品であり、その卸売・小売の取引にはもっぱらロンドン葡萄酒商人組合（Vintners' Company）〔1437年に王権から「法人化特許状」を獲得している〕が深く関わっていた。今後は、こうした葡萄酒の取引やそれと深く関わっている葡萄酒商人組合の動向も王権やロンドン市との関連で明らかにしていく予定である。